

『鶴梁文鈔』という書物から

——漱石と荷風をつなぐもの——

中 島 国 彦

1 漱石と林鶴梁との出会い

自分自身が書き記す文章が、どういう言葉の世界から生まれたかを考える時、若い頃にどういう文章に接していたかは、興味深い問題に違いない。夏目漱石の、見事な近代の知性溢れる文章の生成を考える時、談話ではあるが「余が文章に裨益せし書籍」(一九〇六・三・一五「文章世界」創刊号)は、いろいろな問題を考えさせてくれる。

文章鍛錬上に最も多く裨益した書籍、文章と、特に挙げていふべきものはないが、先づ自分が好きな作家をいへば、英文ではスチブンソン、キップリング、其の他近代の作家である。いづれも十九世紀の初め頃のと違ひ、文章に力があつて間緩こくない。(中略) 国文では、太宰春台の『独語』、大橋訥庵の『關邪小言』などを面白いと思つた。(中略) 漢文では享保時代の徂徠一派の文章が好きだ。簡潔で句が締つてゐる。安井息軒の文は今も時々読むが、軽薄でなく浅薄でなく

てよい。また林鶴梁の『鶴梁全集』も面白く読んだ。

(傍点中島)

明治以前の文章についての発言だが、漱石は一貫して文章の「力」を重視している。「一体に自分は和文のやうな、柔かいならだらしたものは嫌ひで、漢文のやうな強い力のある、即ち雄勁なものが好きだ」(同)というのが基本の考えである。「国文」について、「何れも子供の時分に読んだものであるから」とあるが、もとより十代の後半以降の、文章や文学に目覚めた時期の読書体験に違いない。

江戸中期の文人太宰春台の「独語」に接する機会としては、大正時代の近世随筆文学の繙読経験が考えられよう。一八九〇年(明治二三)九月に帝国大学文科大学英语学科に入学してから、やや厭世的な気分が続くようになる。その後、刊行され始めた随筆叢書『百家説林』全十冊(一八九〇・一一・一七―一八九二・二・二〇、吉川半七)を継続購入しようだ。東北大学附属図書館の「漱石文庫」には、「巻九」まで九冊現存している(各冊に購入日付が記

されている。「独語」は、「巻一」巻頭の収録で、漱石は一八九一年一月二日に購入している。

云ふたきことを云はぬは。腹ふくる、わざなりと。昔の人の云へりしハ誠なり。さればとて。思ふこと云ふべき人にあらねバ得云はず。云はねば。今も腹ふくるとあれば。只そらむきてひとりごちて。腹をすかすより外のことなし。

漢文の持つ確かな「力」は弱いが、かえって生き方やもの見方について、中身で学ぶところがあつたのだろうか。司馬江漢の「春波樓筆記」に強く惹かれた経験も注目されるが、その文章は七月三十日に購入した「巻五」に収録されているのである¹⁾。

ここでわたくしが注目したいのは、幕末の江戸の文人林鶴梁の文業に漱石が関心を寄せていたという事実である。この談話では「鶴梁全集」となっているが、正確に言えば、林鶴梁の文章は『鶴梁文鈔』（初刊一八六七刊、続編一八八一、山中市兵衛刊）に収められており、漱石がしっかりと文集を繙いたことがうかがわれる。林鶴梁の名は、漱石が書き残したものとしては、『文学論』のためのノート、『定本漱石全集』第二十一巻（二〇一八・八・九、岩波書店）では、「[VI-7] Realism and Idealism (Hudson)」となっているノートに、次の一行があることが知られている。原文横書きを縦書きにして引用する。

○林鶴梁 烈士喜剣ノ碑。露伴 吁吾死哉……皆写真ナラズ
この直前に、「小説ヲ分ツテ三トス incident, character, passion 而シテ第一ヲトルコハ読者ヲシテ自ラ hero トナリテ incident ニ遭遇セシムル為ナリ」とあり、ある出来事の中に入り込むような

感情の動きについて言及があつた。「烈士喜剣ノ碑」の文字には、恐らくそれを読んだときの感動が隠されていたはずである。

「烈士喜剣碑」という文章が、林鶴梁と若き日の漱石をつないでいたことがわかるが、ではその文章はどういうものだったのか。「烈士喜剣」は鹿兒島藩士村上喜剣で、祇園で遊ぶ大石良雄を訪ね、本心を試そうとして蛸を足に挟んで差し出したが、大石は平然と食べ内心を明かさず、後日討ち入りを知った喜剣が自分の不明を恥じて大石の墓前で自決したというエピソードで知られる。碑文を鶴梁に依頼したが、実際に碑が建てられたのは鶴梁歿後、一九四〇年だったという。が、「喜剣者。不詳何許人。或云。薩藩士。蓋気節士也」から始まる文章は名文で、人口に膾炙していた。三田村鳶魚「快男児喜剣」（一九四〇・六・一七「大日」、『江戸の史話』（一九四一・一一・二〇、大東出版社）所収）には、「私共の少年の頃、誰も彼も鶴梁文鈔を読みましたが、往々暗誦する者もあつて、散歩の途中などで朗々と得意に読み立てていました。その中で烈士喜剣の碑文は名文で、一番愛誦されました」とも記されている。島崎藤村や柳田國男らが、興が乗ると、二葉亭四迷「あひまき」の一節を口にするのと同じわけだ。

実は、「烈士喜剣碑」は、明治時代には、中学校の文部省検定済の「漢文」の教科書によく採択されていた文章なのである。管見に入ったものでは、国語漢文研究会編『中等漢文読本』（一九〇一・三・二三訂正四版、明治書院）に、林長孺の名前で、返り点や送り仮名付きで収載されている。この一冊には、もう一つ林長孺「靜古館記」も載っており、「漢文」といっても安井息軒などの日

本漢文も多い。こうした状況を忘れてはならないだろう。

吁余死矣。夫余日獸視良雄。乃我目之罪也。余舌獸罵良雄。乃我舌之罪也。余足獸食良雄。乃我足之罪也。余心獸待良雄。乃我心之罪也。一身皆罪。吁余死矣。

リズムを持った行文は見事で、誰もが忘れられない一節だ。「吁余は死せん」のリフレインを、口にする若者は多かつたらう。林鶴梁は、文中で「奇節」の語を使うが、それは例えば「人に越えた節操」と理解されている（菅野礼行・国金海二『漢文名作選5 日本漢文』、一九八四・八・一、大修館書店）。この場合は、「奇」にはマイナスのイメージは無い。まさに「優れた」「類いまれな」なのである。碑文の末尾においても、「喜劍之死固奇矣。伯基（*）碑を建てようと考えた中西伯基 此挙亦奇也。独恨余文不奇耳」と「奇」の文字が連なる。恐らく、この「奇」は明治二十年代であったのなら、「狂」の文字に置き換わる内実を持っていたのではないか。それは、この頃の若者だった漱石の心情そのものでもあったのではないか。正に、「狂なるかな狂なるかな僕狂にくみせん」（二八九一・四・二〇付、正岡子規宛）である。

2 「奇」と「気節」の間

「烈士喜劍碑」の存在に注目し、その意味を明らかにした業績に、岩波書店版『漱石全集』完成に挺身した秋山豊氏の『漱石の森を歩く』（二〇〇八・三・五、トランスビュー）の一章がある。林鶴梁の「烈士喜劍碑」に漱石が言及したものに、一八九六年（明治二九）十一月の俳句「初冬や刻むや烈士奇劍の碑」（子規に送り

たる句稿二十八句の一句）があり、さらに古くは、一八九一年（明治二四）十一月七日と十日の二通の正岡子規宛書簡が存在することを紹介し、意味づけている。俳句は、同じ句稿に「冬来たり袖手して書を傍観す」とあるので、その時『鶴梁文鈔』でも読んでいたのだろうか（因みに、この本の名は歿後に残された漱石蔵書のリストにはない）。それ以上に、結婚半年後のこの頃、漱石が忘れられない小文『人生』（一八九六・一〇・一「龍南会雜誌」）を書いていることに注意したい。気持が高まり、何かを見据えようとする時、この文章が思い出されるのだろうか。

秋山氏が注目するのは、「気節論」を展開した、若き日の子規宛書簡の存在である。漱石は、十一月七日付の書簡で、子規に対して「気節」の語の意味を論じ、「そも気節と申すは己に一個の見識を具へて造次顛沛の際にも是を応用し其一生を貫徹するの謂に候得ば其人の気節の有無は其人の前後を通観せず候ては全体上其人の行為が其人の主義と並行するや否やは判じ難きかと存じ候」（傍点中島）と記している。秋山氏の理解は、子規の手紙（これは現存しない）に展開されていた「気節論」について、「それが非常に不用意かつ平板のものでたらしく、漱石にはカチンと来た。漱石の傾向として、論証されない精神論には敏感に反応する」というものである。子規は漱石に書き送った手紙に、折から刊行された鈴木光次郎編輯の『明治豪傑譚』（巻之二）一八九一・一〇・二三、「巻之二」一〇・二一、東京堂、のち「巻之三」を刊行二二・二〇）を、日付からみて、一冊ないし二冊送ったようである。面白いから読んでみる、という気持だ。が、漱石は、その本に描かれた人

物に「豪傑」性を全く感じず、子規の安易な理解に反論するのである。

それが、三日後の、十日付の手紙における更なる議論に発展するわけだ。実は、その手紙に喜剣の例が出て来ており、「喜剣の主義長生にあれば墓前に死するは節を損したるなり喜剣の主義任侠にあれば墓前に死するは節を全ふしたるなり」と記されているのである。墓前で自決するのは一時の気まぐれではなく、その行為に喜剣の生涯が示されている、というわけである。因みに『明治豪傑譚』には、喜剣に触れた文章は見当たらない。

気節は（己の見識を貫き通す）事と申し上候積り。

この書簡の一節が、若き日の漱石の姿勢だった。喜剣の名を出すことで、漱石はかつて読んだ鶴梁の文章に隠れているエネルギーを蘇らせたのではあるまいか。

子規と漱石のこうしたやり取りより少し前に、喜剣に関心を持った文学者がいた。『文学論』のためのノートに名前が出ていた「露伴」である。秋山氏は、「どんな脈絡から発したのかつまびらかにしない」とするが、徳田武氏によって露伴の『奇男児』（一八九・二一・一三）一八「読売新聞」が、「烈士喜剣碑」を典拠として書かれたことが実証されている。³ 徳田氏の言うように、「露伴の精神の内部に気節の士としての要素が含有されている」のは確かだが、奇剣を描く行文に工夫は見られるものの、「吁吾死哉」の四文字が作中に見られるわけではない。原文の凝縮されたエネルギーは、『奇男児』の末尾で、「或夜泉岳寺に入り、大石が墓前に端坐し、一通の遺書残す事もなく、朱鞘に記せし何時にても死

申候丈けを遺品に、腹割きて音もなく死したる後は、碑に奇剣の名のみおほるに、松杉暗く月光弱し二百年の春の夜毎」としても、弱まってしまうのではなからうか。

ノートの記載から、漱石がこの露伴の作品を知っていた可能性は大きい。問題はノートにある「皆写真ナラズ」の一節に違いない。ノートの表題は、「Realism and Idealism (Illusion)」だった。ここで言う「写真」は、「Realism」とつながり、「写真」の意味で使われているのではないか。が、「烈士喜剣碑」の骨格は「写真」ではなく、「Illusion」とも言える感情のほとばしりであり、その意味で「Idealism」に近いものだ。「鶴梁文鈔」では、「於是展左脚。盛魚膾數鬻于脚指頭。使良雄食之」⁴の部分の上部欄外に、「森田節齋曰写生写生」の字が印刷されているが、この部分は森田節齋が指摘するような「写生」には程遠い、普通の措辞だと思われる。部分的なレトリックではない、文章全体を貫通する創作の凝縮度、言葉のエネルギーとも言うべきものが、ここで漱石に問題視されていたのではないか。それが、「皆写真ナラズ」の一節に反映されているのではないか。

3 「気節」から「趣」へ

『鶴梁文鈔』を読む態度は、人によって違いが生ずるのは言うまでもない。その意味で、林鶴梁に深く親しんだもうひとりの近代の文学者として、漱石より十三歳年下の永井荷風の名は忘れられない。

荷風は、『葦齋漫筆』の一節（一九二五・六・一「女性」）で林鶴

梁を取り上げ、その魅力と人となりを描く。『荷風隨筆』(一九三三・四二・二八、中央公論社)収録の時加筆があり、その後も手入れがなされた。資料を踏まえた文章なので、以下の引用は最終仕上げの本文を底本とした『荷風全集』第十五卷(一九六三・一一・二、岩波書店)に拠ることとする。

「女性」連載のこの一回分の部分の後半で、荷風は鶴梁伝とも言うべき、鶴梁の生涯を素描する一節を置いている。麻布澄泉寺の墓から説き起し、幕末の生涯、そして明治の世になってからの鶴梁の姿勢を紹介する。ここで注意すべきは、荷風が鶴梁のもう一つの有名な文章「与小松生論出処書」の一説を引用して骨子を作っていることである。どのように荷風が鶴梁の文章を引用しているか、見ておきたい。

其「小松生ニ与ヘテ出処ヲ論ズルノ書」を見るに、「出処進退ハ士ノ大節ナリ。前ニ徳川氏ヲ以テ則チ退キ、後ニ王朝ヲ以テ則チ進ム。是卑キヲ去ツテ尊キニ就クナリ。畜ニ節ヲ徳川氏ニ失フノミナラズ、又罪ヲ朝廷ニ獲ンコトヲ恐ル。略中他日国家大日本史ノ撰ヲ続クルコト有ランカ、幸ニ名ヲ其將軍大臣伝ノ末ニ列セラルルコトヲ得バ則チ足レリ。」と。何ぞ其の言の悲壯なるや。(傍点中島)

「与小松生論出処書」は、「風霜凜然として、頑夫も廉に儒夫も立たしむる概があるといわれている」(三浦叶「明治の漢文」、『明治文学全集62 明治漢詩文集』所収)とされるような、ある激しさがある。文章の後半には次のような一節も見え、その気概が知られよう。書き下しの形で紹介する。

今自ら死に至るの年まで、堅臥して起たず、以て一瞑棺を蓋うを期せ使むるも、顧みて可ならず乎。

わたくしは、この一節を書き写しながら、漱石が最も気概が強かった、一九〇六年(明治三九)の書簡の有名な一節に通じるものを感じる。例えば、このような部分だ。

功業は百歳の後に価値が定まる。(中略)余は吾文を以て百代の後に伝へんと欲するの野心家なり。

(一九〇六・一〇・二二付、森田草平宛)

僕は一面に於て俳諧的文学に出入すると同時に一面に於て死ぬか生きるか、命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい精神で文学をやつて見たい。それでないと何だか難ですて、易につき劇を厭ふて閑に走る所謂腰拔文学者の様な気がしてならん(同一〇・二六付、鈴木三重吉宛)

もとより荷風は、大きな仕事で鶴梁を顕彰しようとはしない。しかし、こうした表現を並べてみると、林鶴梁と漱石と荷風の間、何らかの繋がりが見えてくるように思うのである。正に、「何ぞ其の言の悲壯なるや」である。

「女性」連載では、『葦斎漫筆』は前月の掲載は無く、その直前は四月号(四・一)である。実はその部分の最後で記されているのが、赤穂義士のこと、高輪泉岳寺の義士木像についてなのである。その部分を書きながら、荷風に林鶴梁の文章が想起されたかどうかは定かではない。ここで大切なのは、すぐに書かれた六月号の部分で、これまで見てきた鶴梁の気概についてではなく、『鶴梁文鈔』の別の文章、「卷十」所載の「麻溪紀勝」という一文(一

八六二執筆）の風趣についてから書き起こされているという事実である。後半で展開する「何ぞ其の言の悲壮なるや」の前に、全く別の内容を書き記すのだ。

そこにこそ、一九二〇年（大正九）五月に麻布市兵衛町の「偏奇館」に居を定めてからの、荷風の立ち位置があった。

林鶴梁について書かれた部分は、最初の方で「麻溪紀勝」の紹介から始まる。

林鶴梁は（中略）嘉永安政の交幕府の代官なり。麻布谷町南部坂下に住し、其の邸内に多く梅花を植ゑ、扁して梅花深処といひぬ。鶴梁が麻溪紀勝は麻布谷町近傍の岡阜溪谷の風光を称美したるものにして、竊に王右軍が山陰の勝に擬したり。谷町は市兵衛町と相接す。予家を市兵衛町に卜し移り住みてより既に五年なり。今たまく、麻溪紀勝をよむに及んで、五年來且暮目にせし所の窗前門外の風景は、悉く鶴梁が紀中ものたりしを知りぬ。

こうした説明は自然であり、荷風が鶴梁の文章の自然描写から入っていったことは充分納得がいく。その根源に「興趣」ということがあることは、「予が日々漫歩散策の興趣は之がためにおのづから亦新なることを得たり。則眼前の光景に对照するに名家の文を持し、独り自ら嬉しむと云ふ」（傍点中島）という興味深い一節からも理解出来よう。外部との繋がりや、いちど「興趣」という情感の世界に溶解させ、そこから新たな世界を作り出すのである。

荷風の文章は、麻布の風景を「見る」ことから始まる。そして

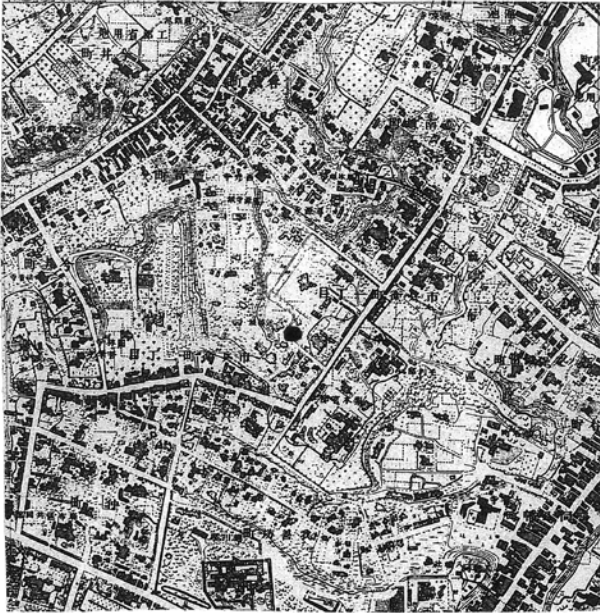
実際に「歩く」ことで、見えるものを現実化するのだ。それは、例えば「烈士喜劍碑」という文章を読むのとは、全く違った体験である。

赤坂靈南坂を上るや、一路髪之如く東に走り、やがて南に迂曲して三河台六本木の辺に通ず。之を麻布市兵衛町の通衢となす。路傍に老桧数株鬱然として繁茂する処、左側に赤き煉瓦塀、右側に白き石牆あり。紅白相對して路を挟むこと凡一町余りなり。赤き煉瓦塀は宮内省御用邸にして、往古は奥州八戸の城主南部遠江守の上屋敷なりき。丸に向鶴の定紋打付けたる長屋門今尚在り。白き石塀は旧小田原藩の支封大久保長門守の邸址にして、今は素封家住友氏の別墅なり。鉄門石牆巍然として城郭の如く、円林茂密して台宅を包む。

「気節」が「意」の世界との緊張関係とするなら、こうした描写を支えるのは正確な感覚によって支えられた「情」の世界に違いない。財閥の「別墅」を見ても、それへの批判は生まれえない。眼の前の世界と、昔描かれた「麻溪紀勝」の文章を対応させるという「知」の活動がそこに加わる。そこに生まれるのが「興趣」であり、その一語は少し先では、「風趣」「幽趣」などの語に置き換えられて繰り返される。

『葦齋漫筆』の鶴梁についての文章では、場所への眼差しの他に、描かれた植物や山の手の変化に富んだ地形に関する言及が注意される。特に、参謀本部陸軍測量局地図（一八八三測量、一八八七・八出版）を実際の場所と対応させると、荷風の描写がさらに光り輝く。この地図は、周知のように、等高線がはつきりと出ている

一万分の一地形図である。もちろん急激な土地開発で、現在は全く違った風景が描き出されるが、荷風の描写をたどるにはうれしい資料だ。掲出部分の最上部に、鶴梁の墓のある澄泉寺、坂の途中の道源寺や西光寺の名も、谷町・笹筒町・市兵衛町などの町名も探し出すことが出来る。中央部分の●を付したが、荷風の家「偏奇館」の場所である。



麻布谷町より笹筒町市兵衛町の辺、地勢の起伏すること波濤の如く、懸崖の半腹には今日と雖猶叢叢雑木の茂密せるあり。崖下には肅然たる環堵の中果樹菜蔬を種るものあり。

正に、「地勢の起伏」が、風景に魅力を与えている。「麻溪紀勝説く所の勝景猶渺しとなさず」と記されるように、魅力的な場所や点景は多く、「勝景」には事欠かない。その中で印象的なのが、植物の世界である。「辛夷」「躑躅」「桜」「公孫樹」「笑靨花」と触れられている植物をたどってみても、荷風が情感をどういふ小道具によって描き出そうとしているかが理解出来るだろう。

ここで思い出すのが、漱石の「硝子戸の中」の「二十」（一九一五・二・二「東京朝日新聞」「大阪朝日新聞」）で描かれた、馬場下から神楽坂に至る道の風景である。「私の頭に染み込んである」といふ光景は、こう描かれる。

其位不便な所でも火事の虞はあつたものと見えて、矢つ張町の曲り角に高い梯子が立つてゐた。さうして其上に古い半鐘も型の如く釣るしてあつた。私は斯うした有の儘の昔をよく、思い出す。其半鐘のすぐ下にあつた小さな膳飯屋もおのづと眼先に浮かんで来る。縄暖簾の隙間からあた、かさうな煮メの香が煙と共に往来へ流れ出して、それが夕暮の靄に融け込んで行く趣なども忘れる事が出来ない。私が子規のまだ生きてゐるうちに、「半鐘と並んで高き冬木哉」といふ句を作つたのは、実は此半鐘の記念のためであつた。（傍点中島）

想起された「半鐘」「冬木」は、荷風が描くような、ある身体性を持った実体のある点景では無いかもしれない。しかし、俳句

という表現の中で定着されることで、かえって生きてきたように思う。それは、「趣」の世界での心の動かし方であろう。「麻溪紀勝」とのつながりでは、漱石との接点がないように思われるが、「趣」ということでは、あるつながりが感じられるのではないか。

注1) 『百家説林』をめぐる体験については、拙著『近代文学にみる感受性』(一九九四・一〇・二二、筑摩書房)の「4章」で考えた。

(2) 「狂」の問題については、拙著の「5章」参照。

(3) 「奇男児」と「烈士奇剣碑」(一九八五・三・一「明治大学教養論集」一七九、のち『近世近代小説と中国白話小説』(二〇〇四・一〇・二二、汲古書院)所収)。

(4) 既出『漢文名作選』の読み下しを記しておく。「是に於いて左脚

新刊紹介

植田康夫・紅野謙介・十重田裕一編

『岩波茂雄文集』全三巻

本書は、岩波茂雄が上京した中学時代から死去までの書信、文章、座談会やインタビューでの発言等、三百八十一篇の作品と付録二篇を収録している。各巻では編者が収録作品を、その時期における岩波の経歴や彼の周辺と関連させながら解説している。第一巻の収録内容は、上京前の一八九八

を展べ、魚膽数嚙を脚の指頭に盛り、良雄をして之を食らはしむ」。

(5) 幕末の一時(一八四三～一八六二)の鶴梁の日常を伝える日記が、『林鶴梁日記』全六巻(二〇〇二・七・三〇～二〇〇三・一〇・一〇、日本評論社)として刊行されている。第一巻の保田晴男「解説」も示唆に富む。

(6) 『明治文学全集62 明治漢詩文集』(神田喜一郎編、一九八三・八・二五、筑摩書房)には、鶴梁の作品としてこの一編がとられている。原文及び書き下しを収載。

※本稿は、二〇一八年十二月一日の早稲田大学国文学会での同題の講演を出発点にし、論旨を発展させたものである。成稿に当たり、何人もの方からご教示を受けることが出来た。(二〇一九・四・二四)

年から、欧米旅行をした一九三五年までの作品であり、「教師から本屋へ」、「岩波文庫の誕生」、「創業二〇年と岩波全書」、「欧米視察旅行へ」という題で四部に整理されている。

第二巻では、一九三六年から一九四一年までの作品を収録し、「科学の普及を目指すして」、「日中戦争と岩波新書」、「出版新体制」のなかで「の三部に整理している。その中には外遊の見聞に基づく文章が多く、出版人として戦争に触れる言論も多見である。

第三巻では、一九四二年から没年である一九四六年まで、つまり太平洋戦争中と戦後一年における作品を収録しており、「戦時体制下の出版人」、「貴族議員となる」、「『文化の配達夫』」の題で分類する。また、年代未詳の作品もまとめられ収録されている。本巻の最後には年譜を加える。

本書は岩波の作品を全面的に収録している文集であり、岩波茂雄や岩波書店を研究するために、必備の書だと言えるだろう。(二〇一七年三月 岩波書店 B5判 平均四一六頁 本体各四二〇〇円)〔簡雅雅〕